

原子力から撤退する世界の流れ

京都大学 原子炉実験所 小出 裕章

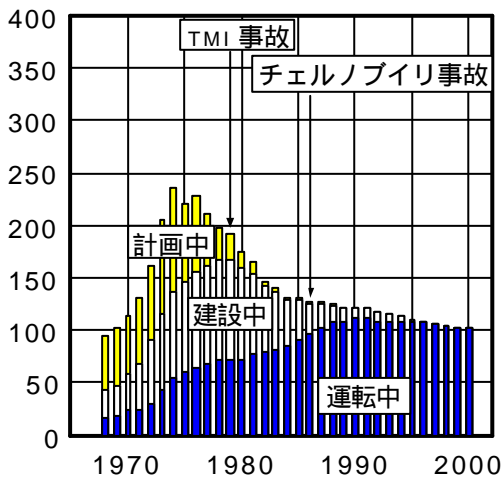
夢から覚めた欧米

原子力が未来のエネルギー源であるかのような幻想が、日本ではいまだに残っています。また、国や企業も積極的にそのような宣伝を流し続けています。しかし世界の核(=原子力)先進国は、すでに1970年代には原子力からの撤退を始めています。

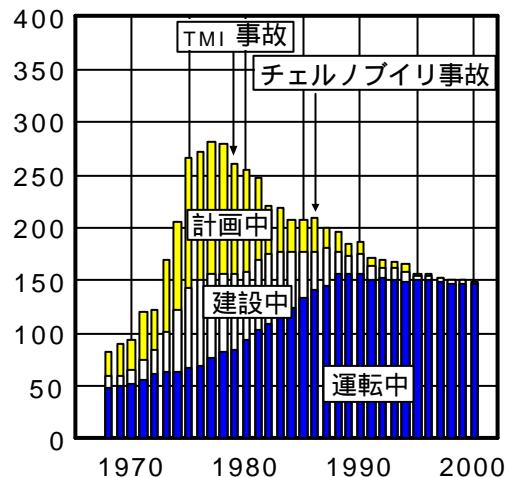
たしかに欧米にも一時、原子力ブームはありました。しかし、ウラン資源は実に貧弱であったこと、評価できないほど安くなるといわれた経済性はいっこうに改善されないこと、膨大な放射能の蓄積による事故への恐れ、廃物の処分法すら見えないこと、核拡散上の歯止めを失うことなどなど沢山の問題が立ち現れてきたた

め、米国では70年代前半に、ヨーロッパでは70年代後半には原子力からの撤退が始まっています。その点を、下の2枚の図に示します。60年代末から70年代はじめにかけて急増に増加した計画中・建設中の原子力発電所は、70年代半ば前後を境に劇的にキャンセルされていきました。現在、欧米には合計249基の原子力発電所が動いています。建設中の原子力発電所がフランスに2基残っているだけで、計画中のものは1基もありません。米国のブッシュ新政権は原子力の再生にも意欲を示していますが、一度崩壊した産業は容易に元には戻りません。今後は、寿命を迎えた原子力発電所が次から次へと廃炉となっていきます。

[基] 米国の原発の開発状況



[基] 西欧の原発の開発状況



エネルギー問題の本質

これまでエネルギー問題とは、エネルギー資源が枯渇することと思われてきましたし、その解決策が原子力にあるかのように思われてきました。しかし、この連載でこれまでに示してきたように、もともと原子力にエネルギー問題を解決する力はありません。また、原子力に手を染めてしまうと、将来世代への重荷を残すとともに、現世代においても原発を立地する地域やウラン鉱山周辺住民、廃物を押しつけられる地域、さらには被曝労働者たちに犠牲をしわ寄せします。

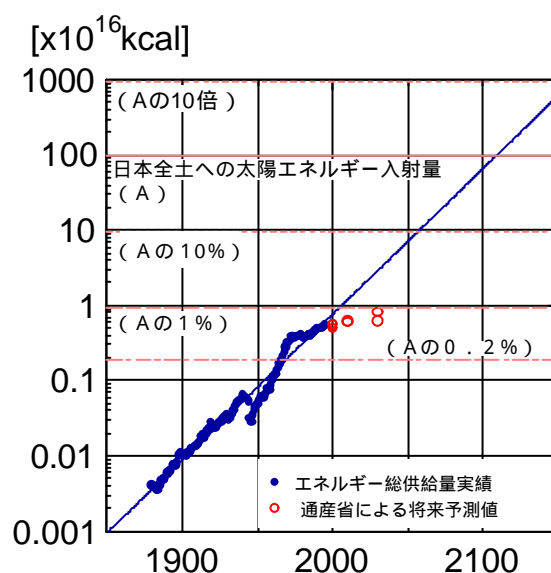
その上そもそも、エネルギー問題とは資源の枯渇のことではなく、むしろ資源を沢山使いすぎることによる環境の破壊のことなのです。特に日本は深刻です。

深刻な日本の状況

日本においては1880年代以降、50年で10倍になるような率でエネルギー消費の拡大を続けてきました。その結果、現在、日本に入射する太陽エネルギーの総量に比べて約0.6%のエネルギーを人為的に消費しています。地球に降り注ぐ太陽エネルギーのうち、風、波、空気の対流など、ごく普通に私たちが自然現象と呼んでいる現象を引き起こすために使われている割合は0.2%でしかなく、現状の消費量ですらすでにその3倍になっています。このままエネルギー消費の拡大を続けるならば、数年後には太陽エネルギーの1%、2050年には10%、2100年には太陽が我々に与えてくれているエネルギーと等しいだけのエネルギーを人為的に消費することになります。そうした時代がどんな時代になるか人類には経験がありません。またそれを予測できるような学問もありません。しかし、かりにその時代の日本においてまだ人が生きられたとして

も、従来と同じスピードでエネルギー浪費を続けるかぎり、2150年には太陽エネルギーの10倍、2200年には100倍のエネルギーを使うことになってしまいます。そのような未来に人類が生き延びられないことは当然です。

エネルギーの浪費になってしまった日本人にとって、エネルギー消費を抑制することは容易なことではありません。原子力を推進しようとする人たちは消費を抑えることなど出来っこないとして、はじめからエネルギー消費の拡大を前提にしています。しかし浪費を抑えられないなら、私達自身が生きる環境を失います。結局なによりも大切なことは、人類が生きていくために必要なエネルギーについて厳しく考察を進め、浪費を抑え、環境と調和したエネルギーを使用する社会自身を作り出すことです。そのためには長い時間がかかります。私達がいつまでも目を覚まさないのであれば、破滅はそう遠くありません。



日本におけるエネルギー総供給量の変遷